

第6回 宇陀市学校適正化推進委員会

令和5年1月23日（月）
宇陀市役所 大会議室

宇陀市学校適正化たたき台について

1 小・中学校それぞれで段階的に適正な規模を維持

2 4地域に小中一貫校

3 室生地域は小中一貫校、他の地域は小・中学校それぞれで段階的に適正な規模を維持

【凡例の見方】

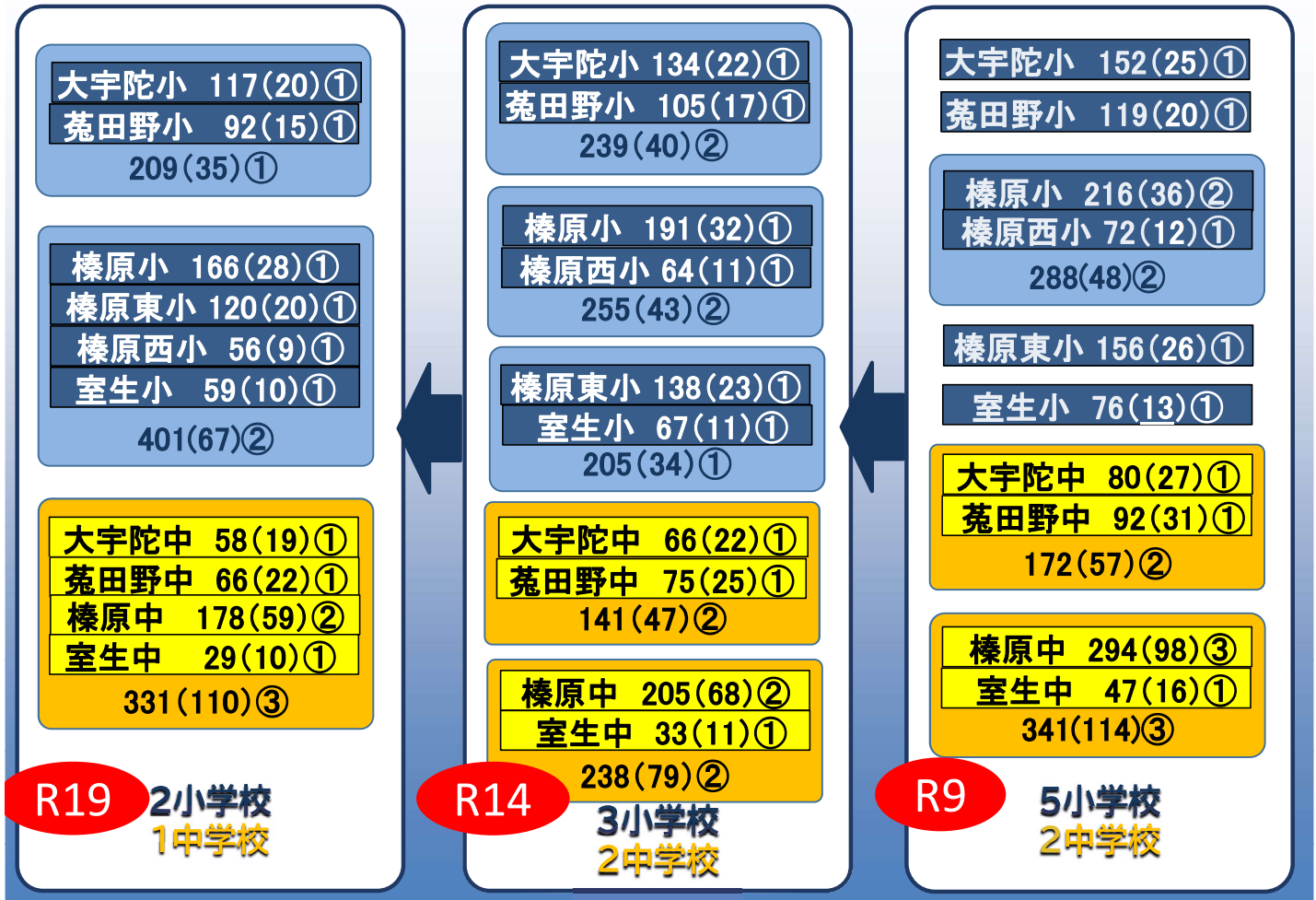
全校児童生徒数
（推計値）

1学年当たりの平均
児童生徒数（推計値）

1学年当たりの
学級数（推計値）

大字陀小117(20)①
菟田野小92(15)①
209(35)①

1 小・中学校それぞれで段階的に適正な規模を維持



1 小・中学校それぞれで段階的に適正な規模を維持

案1で実現する具体的な適正化の形

- 各学年2学級以上（1学級となる場合でも20人前後）の学校を維持することができる。

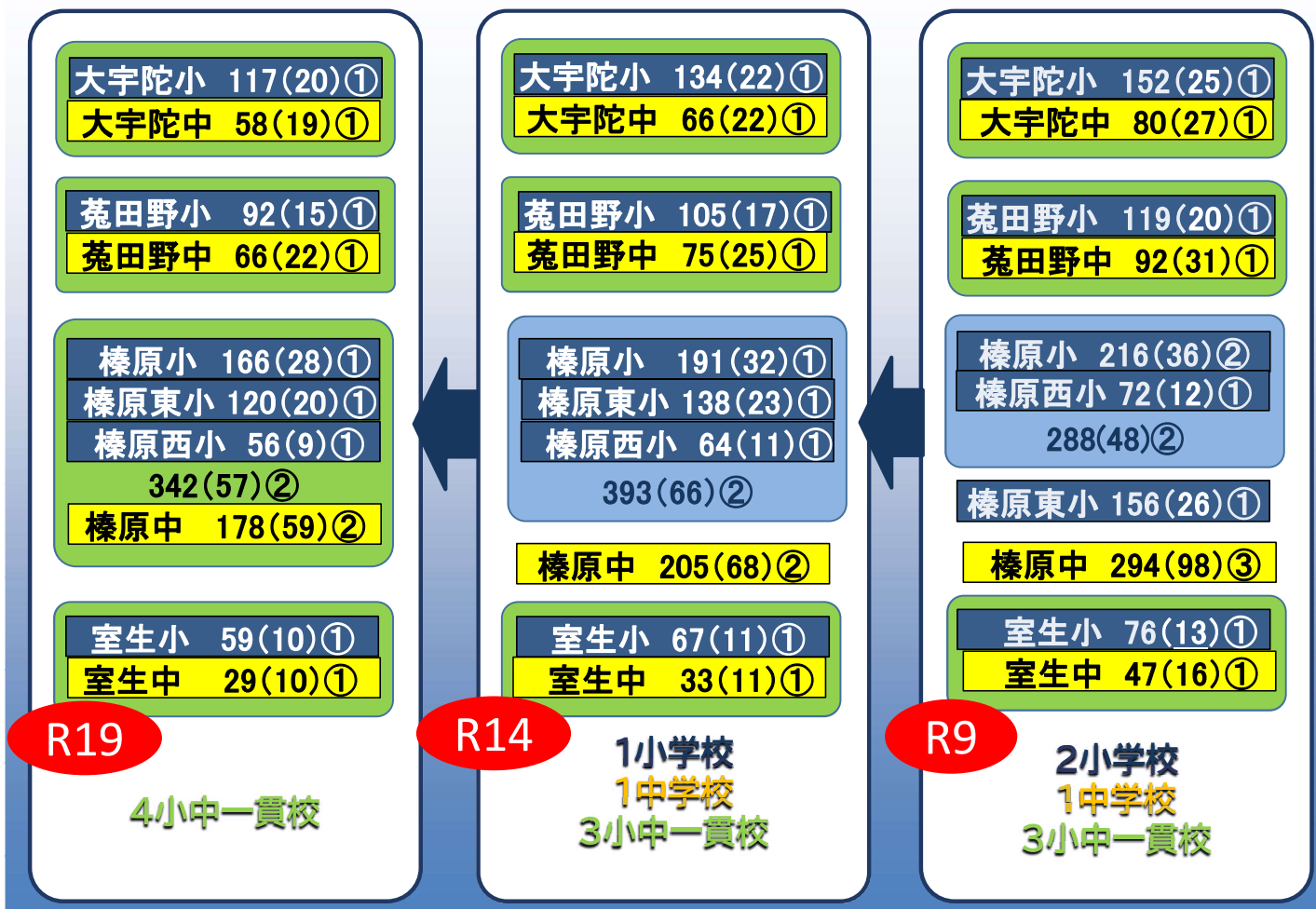
【想定されるメリット】

- ・クラス替えができ、友達関係が固定化しにくい。
- ・授業などで多様な考え方に触れることができる。
- ・運動会など集団で行う学習活動の幅が広がる。

【想定されるデメリット】

- ・通学範囲が広くなり、通学時間が長くなる児童生徒も発生する。
- ・教員の児童生徒一人当たりにかかる指導時間が短くなる。

2 4地域に小中一貫校



2 4地域に小中一貫校

案2で実現する具体的な適正化の形

- 地域や少人数指導の特色を生かした教育環境を整えることができる。

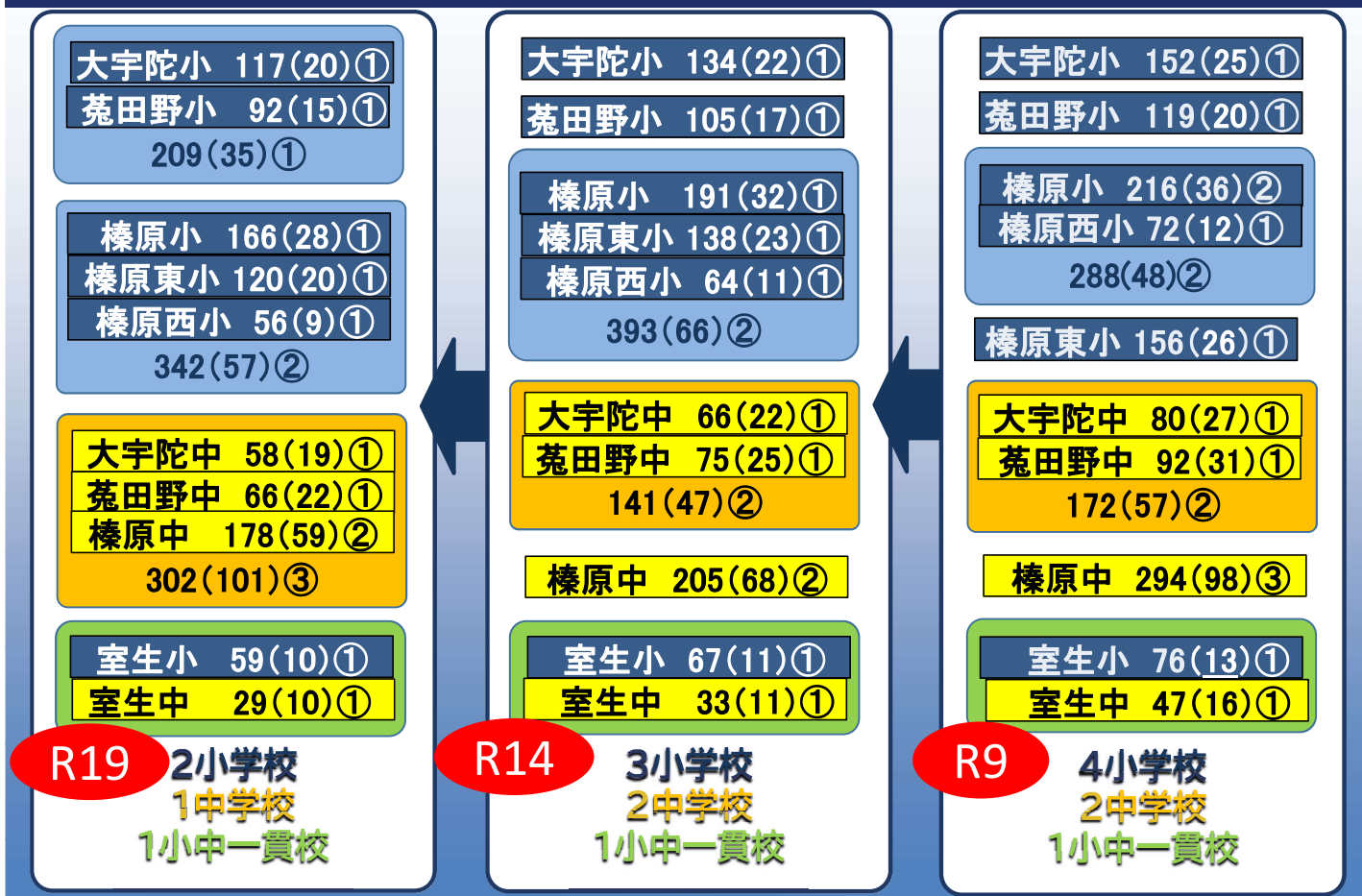
【想定されるメリット】

- ・ 通学時間の拡大を最小限に抑えることができる。
- ・ 教員の児童生徒一人当たりにかかる指導時間が長くなる。
- ・ 小・中学校の9年間を通した指導が行いやすい。

【想定されるデメリット】

- ・ 授業などで多様な考え方に触れる機会が少なくなる。
- ・ 運動会など集団で行う学習活動に制約がある。
- ・ 各学年の児童生徒数の急増は見込めず、将来的には、複式学級が生まれる可能性がある。

3 室生地域は小中一貫校、他の地域は小・中学校それぞれで段階的に適正な規模を維持



3 室生地域は小中一貫校、他の地域は小・中学校それぞれで段階的に適正な規模を維持

案3で実現する具体的な適正化の形

- 市全体として規模の異なる学校が混在し、多様性が生まれる。

【想定されるメリット】

- それぞれの学校の規模を生かした特色のある教育が期待できる。
- 学校選択制を導入すれば、児童生徒のニーズに合った規模の学校を選ぶことができる。（ただし、希望者が多ければ、必ず通学できるとは限らない）

【想定されるデメリット】

- 小中一貫校では、児童生徒数の急増は見込めず、将来的には、複式学級が生まれる可能性がある。
- 学校自由選択制は、学校の小規模化を加速させる心配もある。